

2023年度

札幌日本大学中学校
入学選抜試験
【A日程(1月7日)】

国 語

試験時間 60分

1. 指示があるまで、問題冊子さっしを開いてはいけません。
2. 答えは、解答用紙に記入してください。問題は、～まであります。
3. 試験監督かんとくの先生の指示に従って、試験を開始してください。
4. 試験の途中で、トイレに行きたくなったり、気分が悪くなったりした場合は、手をあげて試験監督の先生の指示を受けてください。
5. 試験開始の指示があってから、解答用紙に「受験番号」「氏名」を記入してください。
6. 解答用紙には、解答以外を記入しないでください。
7. 試験が早く終わっても、周囲を見回したり、横を向いたりしてはいけません。試験監督の先生から注意を受けることがあります。
8. 机の上には、筆記用具以外は置いてはいけません。風邪かぜなどにより、ティッシュペーパーを使用したい場合は、予め試験監督の先生あらかじに申し出てください。

次の文章を読んで、後の問いに答えなさい。なお、設問の都合により本文を一部改変してあります。また、ぬき出しの問いや字数の指定のある問いは、句読点も一字に数えます。

I 進化するテクノロジーが作りだしてきたのは、ひとしなみの世の中でした。しかしみなおなじ世の中になればなるほど、ますます厄介やっかいになってくるのは、では「私」というのはだれなのか、ということですよ。

そっくりおなじ生き物をつくることができるという考え方に立って、クローンのようなものがつくられて、不思議ではなくなっています。大量生産、大量消費を可能にしたこの時代のゆたかさを築いたのは、みなおなじものをいくらでもつくれるという考え方です。

複製の時代、複製が文化である時代が、今という時代です。わたしたちが情報の名でよんでいるのは、おなじものをいくらでもつくれるコピーのことであり、コピーというのは、いろいろなものをみなおなじにしてゆく、おなじものをたくさんつくるという考え方を実現したものです。

みなおなじである状況きょうじょうを、みな平等に、だれもおなじように作りだせる状況が、大波となって打ち寄せてきて、「私」でなければいけない、「あなた」でなければいけないというものがなくなったという時代の波打ち際ぎわにあって、「私でなければいけないものは何か」ということが、これからは一人一人にとっての重要な問題に、というか、難問になってくるだろうと思うのです。

II みなおなじという世のありよう、人のありようをつくりあげてきたのは、人間です。しかし、おなじであっても違ちがうのです。みなおなじであっても、何が違うのかというそのことを考えるいちばんの手がかりは、人間がつくってきたものであって人間をつくってきたものである、言葉です。

二〇世紀に、ユーゴスラヴィア連邦共和国れんぽうという国がありました。ユーゴスラヴィア連邦は、第一次世界大戦後にできた統一国家で、連邦をつくった国の一つにスロヴェニアという国があります。アドリア海に面した、イタリアのすぐ隣となりにある国です。以前、アメリカでわたしは、そのスロヴェニア生まれの物書きと知りあいました。知りあったとき、その人はユーゴ連邦の人でしたが、生まれたときのユーゴは王国。第二次世界大戦後は社会主義をかかげる連邦人民共和国にな

りますが、九二年にスロヴェニアは、連邦から分離し独立します。しかしその人は、スロヴェニアが分離独立する前に、ユーゴからメキシコに亡命にちかいかたちで、どうやら国籍を変えたいらしい。ですから、今はメキシコの市民のようですが、物書きとしては英語で書いています。

そういう人は、どこの人と言うべきなのでしょう。はっきりしているのは、その人がスロヴェニア語のなかに生まれたということ。国は変わり、国籍も変わり、使う言葉も今は違う。そういった経験をもつ人ももうけっしてすくなくありません。そのような経験がもたらすものを思いあわせるなら、国というより、どういう言葉のなかに、どういう母語のなかに生まれたかが、その人の出身、出自にほかならないでしょう。

たとえば母語という日本語や、マザー・タングという英語が、そういう言い方のうちに表しているのは、人間というのは、生まれつく言葉の子どもだということ。①（ア）は（イ）の子どもではなく、（ウ）が（エ）の子どものなだということ。母なるものとは自分が生まれ育った言葉のことです。

わたしたちは日本という国に生まれたと思いますが、そうではなく、日本語という言葉のなかに生まれたのです。肝心なのは、どの国の人かということより、一人一人がどういう言葉のなかに生まれ、どういう言葉によって育てられ、育ってきたかです。

言葉のなかに生まれるというのは、「初めに言があった」という、新約聖書の「ヨハネによる福音書」の冒頭の有名な一行を引いて言えば、人間より先に言葉がある、ということ。②。言葉のなかに生まれて、言葉のなかに育ってゆくのが、人間です。

人間は何でもつくれると思ってきた。そしてみなおなじものをつくってきた。けれども、一つだけつくれなかったものがある。それが③言葉です。

Ⅲ 人間は言葉のなかに生まれてきて、言葉によって育ってゆくのだということに、④みずからよくよく思いをひそめないと、人間はとんでもない勘違いをすることがすくなくありません。そのことに自覚的でないと誤るのです。物はゆたかになり、生活はゆたかになり、暮らしぶりも落ち着いてきて、ずいぶん不自由もなくなりました。にもかかわらず、たった一つ、今の日本でゆたかでないものがあります。ゆたかでないものは何でしょうか。わたしたちにとって今いちばんゆたかでない

いものは、言葉です。言葉がゆたかではありません。

言葉というのは、^⑤人によって異なるものではなく、だれにとってもおなじものです。みなおなじということでは、言葉は平等なものだけれども、人と人を違えるのも言葉です。言葉をゆたかにできる人と乏しくしてしまう人とを、言葉は違えるからです。

大事なのは言葉で自分を表現することだ、とだれもがそう思っていますし、そう言われています。言葉を人間の家来と見なせばそうですが、実際は違うのです。問われているのは、^⑥(オ)で(カ)をどうゆたかにできるか、ではなく、(キ)は(ク)をどうゆたかにできるか、なのです。

言葉のゆたかさというのは、たくさんの言いまわしをあれこれ揃えることではありません。^⑦美ジ麗クは言葉のゆたかさを意味しないのです。そうでなく、むしろ限られた言葉にどれだけ自分をゆたかに込められるかが、言葉にとっては重要なのです。

言葉のゆたかさとは、どういう自分であることを語ることができ、みなおなじなかでおたがいがいという人間であるか、おたがいというふうに違っているかをすすんで語ることができ、そういうゆたかさにほかなりません。日常に普通にある言葉を、どのように使うか。言葉は、それがすべてだからです。

言葉というのは、言葉の使い方の問題です。自分がどういう言葉をどう使うか、その言葉のなかに自分をどう表してゆか、それができるか、できないかが、これからは社会の^⑧いちばん重要なものとなってゆくようになるのではないかと思うわけです。

(長田弘『読書からはじまる』日本放送出版協会より)

問一 —— 線部①の空らんに入る語句の組み合わせとして、最も適切なものを次から選んで記号で答えなさい。

- | | | | | | | | | |
|---|---|----|---|----|---|----|---|----|
| A | ア | 言葉 | イ | 人間 | ウ | 人間 | エ | 言葉 |
| B | ア | 人間 | イ | 言葉 | ウ | 言葉 | エ | 人間 |
| C | ア | 人間 | イ | 言葉 | ウ | 人間 | エ | 言葉 |
| D | ア | 言葉 | イ | 人間 | ウ | 言葉 | エ | 人間 |

問一 (②) に入る文として、最も適切なものを次から選んで記号で答えなさい。

- ア 人間で言葉を作るではありません。
- イ 人間が言葉を作るではありません。
- ウ 人間の言葉が作るではありません。
- エ 人間が言葉を作るではありません。
- オ 人間と言葉が作るではありません。

問三 — 線部③「言葉」について、ここでの意味を表しているものとして、最も適切なものを次から選んで記号で答えなさい。

- ア 記号としての言葉
- イ 複製可能な言葉
- ウ 聞き心地きこちのいい言葉
- エ 人にやさしい言葉
- オ 本当に自分に必要な言葉

問四 — 線部④の「みずからよくよく思いをひそめない」とあるが、「みずからよくよく思いをひそめる」を別の言葉で言い換えたとき、最も適当な語句をⅢの中からぬき出してそのまま答えなさい。

問五 — 線部⑤の言葉の意味を変えないで、まったく別の言葉をⅠの中から五字でぬき出しなさい。

問六 — 線部⑥の空らんに入る語句の組み合わせとして、最も適切なものを次から選んで記号で答えなさい。

- A 才 言葉 カ 自分 キ 言葉 ク 自分
- B 才 自分 カ 言葉 キ 自分 ク 言葉
- C 才 言葉 カ 自分 キ 自分 ク 言葉

D オ 自分 カ 言葉 キ 言葉 ク 自分

問七 — 線部⑦のカタカナの部分^を漢字に直したときに、最も適切な漢字の組み合わせを次から選んで記号で答えなさい。

ア 美字麗苦 イ 美字麗句 ウ 美辞麗口 エ 美辞麗句 オ 美自麗句

問八 — 線部⑧と同じ内容を表している箇所を二十字以上二十五字以下でIの中からぬき出して、その最初と最後の五字を答えなさい。

問九 言葉の新たな意味に気づいたことで、周りの見え方が変わったと感じられたあなたの経験について、その言葉を一語挙げ、どのような経験によってどんな新しい意味に気づいたか、そこでどのようにあなたのもの見え方が変わったか、六〇字以上一二〇字以内で書きなさい。

問十 — 線部のカタカナは漢字に、漢字はひらがなに直しなさい。

- ① エンライの訪問者。
- ② トウカクを現す。
- ③ イツシ相伝
- ④ みんなの意見をシュウヤクする。
- ⑤ 厚意を無下にする。

次の[A]と[B]の二つの文章を読んで、後の問いに答えなさい。[A]は、「ぼくはいつ大人になるの?」という問いに対して熊野純彦くまの すんひこさんが書いた「大人とは、遥かにとおい思いをいだけく存在である」という文章で、[B]は、それについて野矢茂樹のやしげきさんが書いた文章です。なお、設問の都合により本文を一部改変してあります。また、ぬき出しの問いや字数の指定のある問いは、句読点も一字に数えます。

[A] 「大人とは、遥かにとおい思いをいだけく存在である」熊野純彦

たとえば「あのひとは猫だ」と語ったとします。「あのひと」と語りはじめていくらいですから、問題が人間であることはだれでも分かっています。

人間はネコ科にぞくする*愛玩動物ではありませんし、いちにち寝てすごすこともできません。言われているのは、たぶん、「あのひとは気ままなひとだ」くらいのところでしょうか。

大人や子どもといったことばにも、似ているようです。こしちがう、とくべつな使われかたがあります。このことから考えておきましょう。

たとえば、四十歳よじもすぎた「立派な」大人を指して、「あいつは子どもだ」と言うことがあります。へ①～中学にはいったばかりの「ほんの」子どもについて、「あの子ども大人になった」と語ることもあるでしょう。二番目の例は、答えなければならぬ内容にかかわっていますから、ここではまず最初の場合を考えておきます。

四十面しじゅうめんさげたおとこに向かつて「子どもだ」と語るときにも、いろいろなケースがあるでしょう。働こうともしないとか、働いていても自分の仕事に責任を持つとしないとか、相手の気持ちから分からないとか、その他さまざまです。じゅうぶんな検討はできませんけれども、「子どもだ」が、すくなくとも批難の意味をこめて口にされるときには、そこではたいていの場合「自分勝手」とか「自分以外のことを考えない」といった内容が入りこんでいるように思います。

じっさい、子どもとはそうしたものです。子どもはときに「自分勝手」ですし、ときとしてひどく「へ②」です。それは無理もないところで、子どもは「自分以外のもの」をほとんど知らないし、知る必要もないのです。

自分と同じくらい大切なもの、かけがえのないこと、置きかえのできないひと、そうしたなにかを知ることが、おそらくは「大人」になる入口になるのでしょう。それまではただの「子ども」、^③ある意味では「幸福な」子どもであった存在

が、自分以外のもの、こと、ひとを考えざるをえなくなり、自分とおなじくらい大事、あるいはもしかすると自分よりも大切ななにかと感じてしまうことになり、

そのなにかとは、ものでしょうか、ことでしょうか、ひとでしょうか、夢でしょうか。そのどれかは分からないし、そのどれでもいいと言ってもよいのでしょうか。

もうひとつ付けくわえるなら、これはたぶん、ただの入口です。ほんとうに「大人」になるためには、その大切ななにか、かけがえのない或るものを失うこと、大きななにかを諦めることが必要な気がします。

それまで「子ども」だったものは、そのとき、「切なさ」とか「懐かしさ」を覚えることになります。「切なさ」や「懐かしさ」は子どもには理解しにくい感情なのです。手にしたいのに手が届かないもの、もう二度と帰ってはこないものや、こと、ひとへの、それは遠くはるかな想いであるからです。

㊦ 野矢茂樹さんの文章

子どもは『自分以外のもの』をほとんど知らないし、知る必要もない、熊野さんはそう書いています。しかし、率直に言って、この指摘にはへ④ へ人もいるでしょうね。子どもにだって子どもの人間関係があります。親、先生、友だちとの関係、クラブ活動等々、そんな中で、自分以外の他人を知らないわけがないし、知る必要がないわけでもありません。

ポイントは「かけがえのなさ」というところにあります。「かけがえがない」とは、たんに「だいじ」ということではないのです。「掛け替え」というのは代替物です。ですから、「かけがえがない」というのは「代わりになるものがない」ということ。熊野さんも「置きかえのできない」と書いています。

例えば、好きな人ができたとしましょう。そのとき、もしその人の容姿がいいということが好きになったのなら、容姿がよければ他の人でもいいということになります。容姿*端麗でやさしくて仕事ができるからというのであれば、代わりになる人はあまりないかもしれないかもしれませんが、同じような人がまったくないわけではないでしょう。一般に、ある特徴をもっているから好きだというのであれば、その人以外にもへ⑤ へが現れれば、その別の人で代わりになるわけです。それに対して、ある人をその人のもっている特徴で好きになるのではなく、まさにその人がその人だからこそというた

だその一点だけで好きになったとき、それは「かけがえのない」人になります。あなたはその人が好きなのであって、他の誰かでは（その誰かがどのような特徴をもっていても）だめなのです。それが、「かけがえのない」ということです。そう考えると、かけがえのないものって、そんなに多くはないかもしれません。あなたには、何がありますかね。

この点を動物についてさらに考えてみましょう。動物はかけがえのないものをもっていませんか。私はどうもそれに対しては否定的なんです。例えば、「エサ」とか「水」は動物たちにとってだいじなものでしょう。でも、「このエサ」じゃなければだめだということはありません。他のエサが手に入るなら、それでもかまわない。つまり、代替可能であり、だいじだけれど、かけがえのなさはありません。まあ、動物たちのことはよく分からないので、私も絶対そうだと言い張るつもりはありませんが、彼らは「エサ」とか「水」とか「敵」といったある特徴をもったパターンを認識しているだけだと思っうのです。

ペットを飼っている人は、自分のペットが飼い主である自分をかけがえのないものと認識していると思いたいでしょうね（私だってそう思いたい）。いまは犬や猫はどうなのかということの問題ではありませんから、ペットのことは棚上げしておきましょう。擬人化しにくくてもっと反論されにくい動物、例えばイソギンチャクを考えてみます。イソギンチャクがエビをつかまえて食べる。このエビじゃなくちゃだめだということはなくて、ある特徴をもったものならば、なんでもかまわないわけです。イソギンチャクにはかけがえのないものなど、ないでしょう。

こうしたことを、個性と一般性という、ちょっと硬い言葉で捉えることができます。かけがえのないもの、それは個性のレベルにあります。それに対して、同じ特徴をもった他のものと交換可能なもの、それは一般性のレベルにあります。「容姿端麗」という一般性で捉えているか、「へ⑥」⑦」という個性で捉えているか、という違いです。

同じ特徴をもってさえいれば他のものでもかまわないという一般性の態度と、これじゃなければだめなんだという個性の態度はまったく違うものです。それで、ここに人間以外の動物と人間の違いを私は重ねたいんです。そして、子どもはまだ動物に近いのだと、私は言いたいです。子どもは最初イソギンチャクと同じように一般性のレベルだけで生きている。でもだんだん人間のレベルになってくる。熊野さんが指摘した子どもが大人になるための条件「かけがえのない何かを知ること」を、私はこのような話として理解します。

子どもがまず最初に意識するかけがえのないものというのは、自分自身でしょう。自分自身は他のものに取り換えるこ

とができません。自分以外のものはまだ一般性のレベルで捉えていても、自己意識が芽生えた子どもにとって、自分自身は他の何ものにも代えられないかけがえのないものです。イソギンチャクには自己意識はないでしょうから、自分自身をかけがえのないものと捉えている子どもは、イソギンチャクから人間に向けての一步を踏み出しているとと言えます。

でもそれだけではまだ十分に人間的とは言えません。へ ⑧ へ のかけがえのないものと出会ったこと。それが必要なのだと、熊野さんは主張するのです。

しかし、へ ⑧ へ のかけがえのないものと出会うだけでもまだ足りない。熊野さんに従えば、それはまだ「大人になる入口」にすぎません。大人になるためにはかけがえのない何かを失うこと、諦めることが必要だということです。なぜでしょう。ここは分かりにくいところです。熊野さんも「たぶん」とか「気がします」という弱い言い方しかしていません。それ以上何も書いてありませんから、自分で考えてみましょう。

かけがえのない何かを失った経験を思い出してください。まだそういう経験がないという人、熊野さんの基準によればまだ十分に大人になりきれていないということになります。その人はかけがえのない何かを失うことを想像してみてください。それはたんにだいたいなものや失うというだけではありません。他のものに代えることのできない、それ、そのこと、その人を失うのです。へ ⑨ へ 絶対的な喪失です。

かけがえのない何かを失い、その絶対的な喪失を受け入れる。そのとき、私の中に変化が生じるのではないのでしょうか。飼っていた犬に死なれたとしましょう。似たような特徴をもった犬は他にもいるかもしれませんが、でもそれは私が飼っていたあの犬ではありません。似たような犬を見かけたときに、似ているけれど違うというそのことが、私にさまざまな思いを呼び起こすでしょう。悲しみや切なさといった感情が湧き起こるかもしれませんし、一緒に散歩した思い出がよみがえるかもしれません。

私の中に生じる変化がいつそう顕著なのは、やはりかけがえのない人を失ったときでしょう。この場合も、折に触れて悲しみ・切なさや思い出が呼び起こされるでしょうが、それだけではなくて、こんなときあの人だったらどうするだろうとか、あの人だったら何て言うかなあといった思いも生じます。つまり、いまはもういないその人のまなざしでものごとを見るということが起こります。

これはどういふ変化なのでしょう。ちょっと曖昧な言い方ですが、こうしたことを私は「失われたかけがえのないも

のが私の中に息づき始める」のように言いたくありません。かけがえのないものが私の目の前から姿を消してしまふことによつて、私の内側に入り込んでくるのです。私はそのかけがえのないものを通してものごとを見るようになります。もう死んでしまったかけがえのない人のまなざしを通して、ものごとを捉えるようになる。そうして私のものの見方の内にさまざまなものの見方が入り込み、息づき、私の⑩ものの見方は重層化していくのです。かけがえのないもの、かけがえのないこと、かけがえのない人を自分の中に息づかせ、そのまなざしでそうしたかけがえのないものが失われた世界を見るとき、そこには切なさという感情が伴いもするでしょう。そして確かに、これは子どもにはない大人たちの感情であるように思われます。

子どもは目の前のことで手一杯なのかもしれません。自分の目の前にある遊び道具、目の前にいる人、目の前にある食べ物……、それらに*一喜一憂する。その意味では、子どもは無邪気で単純です。でも大人は必ずしもそうではありません。折に触れて、目の前にあるものごとを、いまは失われてしまった目の前にもいや人を通して見ることをします。またイソギンチャクの話を引き合いに出しますが、イソギンチャクは触れたものにしか反応しません。しかし人間は違います。そこにあるものを、そこにはないものの不在の思いが意味づけ、そうして意味づけられた世界に人間は生きています。その意味づけが複雑になり、重層化していく、それが大人になるといふことなのかもしれません。

(A・B)ともに野矢茂樹『そつとページをめくる——読むことと考えること』岩波書店より。

*愛玩……大切なものとしてかわいがること。

*端麗……姿・形が整っていて美しいこと。

*一喜一憂……情勢の変化につれて喜んだり心配したりすること。

問一へ①へに入る最も適切な言葉を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア ただし イ 逆に ウ したがって エ 確かに オ しかも

問二へ②へに入る最も適切な言葉を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 残酷 イ 従順 ウ 寛大 エ 親切 オ 慎重

問三 — 線部③「ある意味では『幸福な』子どもであった存在」とありますが、ここで言う「幸福」とは、文章④の中の言葉で言うと、どういうことだと言えますか。最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア「子どもの人間関係がある」こと。

イ「かけがえのないものをもっている」こと。

ウ「自己意識が芽生え」ていること。

エ「悲しみや切なさといった感情が湧き起こる」こと。

オ「無邪気で単純」なこと。

問四 へ ④ へ に入る言葉として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 頭が下がる イ 口をとがらす ウ 首をひねる エ 耳が痛い オ 目を丸くする

問五 へ ⑤ へ に入る言葉として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 同じくらい好きな人 イ その容姿をした人 ウ 多くの特徴をもった人

エ もっと容姿がいい人 オ その特徴をもった人

問六 へ ⑥ へ に入る最も適切な言葉を、文章④の中から五字以内でぬき出しなさい。

問七 — 線部⑦「ここに人間以外の動物と人間の違いを私は重ねたいんです」とありますが、ここで筆者はどういうことを

言いたいのですか。最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア 人間以外の動物は一般性のレベルで生きているが、人間は個別性のレベルで生きている。

イ 人間以外の動物は個別性のレベルで生きているが、人間は一般性のレベルで生きている。

ウ 人間以外の動物は個別性のレベルだけで生きているが、人間は個別性のレベルだけではなく、一般性のレベルでも生きている。

エ 人間以外の動物は一般性のレベルだけで生きているが、人間は一般性のレベルだけではなく、個性のレベルでも生きている。

オ 人間以外の動物は一般性のレベルで生きているが、人間は一般性のレベルとも個性のレベルとも異なるレベルで生きている。

問八 へ ⑧ へ (二か所あります) に入る最も適切な言葉を、文章□の中から五字以内でぬき出しなさい。

問九 へ ⑨ へ に入る最も適切な文を次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア それがいっまた現れるかわかりません。

イ その特徴は他にはありません。

ウ それをお金で買うことはできません。

エ 似たようなものはどこにもありません。

オ それはもう二度ともどってきません。

問十 — 線部⑩「もの見方が重層化していく」とはどういうことですか。本文の内容にそって六十字以上七十字以内で説明しなさい。ただし、解答は「……から、……ようになること。」という文の形で答えること。

問十一 野矢茂樹さんは、「大人になること」について、熊野純彦さんの文章をどのように理解し、考えていますか。その説明として最も適切なものを次の中から一つ選び、記号で答えなさい。

ア まず、「かけがえのないことを知ること」に注目して、それを人間以外の動物と人間の態度の違いを例に挙げて説明し、次に「かけがえのない何かを失うこと」について、それがどういう変化を引き起こすのか、かけがえのない人を失ったときのことをもとに考えている。

イ まず「自分以外のことを考えないこと」に注目して、それをペットとイソギンチャクの違いを例に挙げて説明し、次

に「大人になる入口」について、それがどんなに曖昧なものなのか、子どもから大人への変化の場合を引き合いに出して考えている。

ウ まず「かけがえのないことを知ること」に注目して、それを人間以外の動物と人間の違いを例に挙げて説明し、次に「かけがえのない何かを失うこと」について、それがどういう感情を引き起こすのか、ペットの場合とイソギンチャクの場合とを比較して考えている。

エ まず「かけがえのないことを知ること」に注目して、それを人間以外の動物と人間の違いを例に挙げて説明し、次に「大人になる入口」について、それがどんなに曖昧なものなのか、かけがえのない人を失ったときのことをもとに考えている。オ まず「自分以外のことを考えないこと」に注目して、それをペットとイソギンチャクの違いを例に挙げて説明し、次に「かけがえのない何かを失うこと」について、それがどういう感情を引き起こすのか、子どもと大人の違いを引き合いに出して考えている。

